

2011年6月1日発行 第124号

## 目次

P1 巻頭言 (棚橋征一副会長)	P17 2011年度年次総会
P2-12 シンポジウム「変貌する家族」	P18 エッセイ「天を恨まず」(三輪公忠名誉会長)
P12 都立三田高校・街頭募金報告	P19 「英会話講座」の門を叩いてみませんか!
P13-15 講演会「私の国ブルガリアの素顔」	P20 事務局便り
P16 ティポロマツ・レクチャー「日本の国際協力の将来」	

## 歴史上の謎を解き明かす

港ユネスコ協会 副会長 棚橋征一



歳のせいもあるのか、歴史ものを読むことが多くなりました。特に、新しい事実を発掘したものとか、斬新な切り口で新しい解釈を加えたものなどに興味をもちます。

歴史といえば、年明け早々に大学のクラスメイトのひとりがすばらしい歴史上の発見をして、マスメディアでも紹介されました。日本の卒業式では定番になっている「あおげば尊し」は、元々、明治時代に文部省が欧米の曲に日本語詞をつけて小学唱歌集に入れた曲のひとつとされてきましたが、その出典がずっと謎のままでした。友人がこの謎に終止符を打ってくれました。

学生時代、熱心にコーラス部で活動していたこの友人は、大学で英語学を講じる傍ら、インターネットを駆使するなどして、小学唱歌集と欧米の古い音楽教科書とを照合し、原曲探求の調査をしてきました。そうした地道な努力が報われて、「あおげば尊し」が実は米国で1871年に出版された「The Song Echo」という本に収録されている「Song for the Close of School」(卒業の歌)という曲と旋律が全く同じであることを発見したのです。テレビのニュースで、ピアニストがこの原曲を演奏するのを聴きましたが、完璧に一致していました。

私事になりますが、以前勤務していた企業が創立百周年を迎えた際に百年史を刊行することになり、その編纂に従事したことがあります。既に70年史が出ていましたが、ひとつ関心をもった点がありました。明治32年(1899)に外国資本の入った初の合弁会社として設立されたのですが、発起人の中にいた2名の米国人のうち、なぜか、片方は名前が知っているだけで、人物像が全く不明のままでした。そこで、折角の機会なので、何とか手を尽くしてこの人物像を解明してみようと考えました。

たまたま東京アメリカンセンターで司書をしている知人がいたので、事情を伝えて相談してみました。米国では昔から紳士録(一般にWho's Whoと呼ばれる)が刊行されているから該当時期の版に当たってみましょうと、すぐに調べてくれました。すると、どうでしょう!同姓同名の人物が採録されており、その履歴を読むとこの人物に間違いがないことが判りました。また、在日中に一高で教鞭をとったことがあるので東大の史料室に当たった結果、関東学院の設立にも深く関係していることが判り、関東学院からはこの人物を詳しく紹介した特集記事を頂きました。さらに、彼が属していた日本アジア協会を探し当てて、保管されていた日本に関する彼の著作を閲覧することもできました。ささやかな歴史発見でしたが、「芋づる式」に史実が判明したときは、当協会の「太公望」水野事務局長の釣りではないですが、やったあ、という思いでした。

(17頁下に続く)

## テーマ：変貌する「家族」

日時：2011年1月18日（火）18：30～21：00

会場：港区立麻布区民センターホール

**基調講演** 「近代家族のゆくえ」 上野 千鶴子 東京大学教授

**発言者** 楊 逸(ヤン イー) 作家(中国人初の「芥川賞」受賞)

岩田 クリスティーナ ドイツ日本研究所専任研究員

新美彰規=アミット・バクシー 日本青年会議所委員

社会はこれからどうなっていくのか？ 超高齢化、少子化による人口減少、単身世帯の急増など、これまでの家族や社会の形が大きな変化の波に洗われています。あらためて「家族」について考える機会でした。



総合司会  
松本副会長

### 上野千鶴子さんの基調講演

#### 「家族はどこまで変わったか？ - 少子高齢化のなかの家族 -」

「本日は国際シンポジウムと言うことで、様々な時代や歴史的背景をもっている社会と日本をどう比べるかを視野に入れながら、少しタイムスパンの長い学術的な話をしたいと思います。」



ソフトで美しいお声、にこやかな表情で時折ブラックユーモアも交えながら近代家族の成立・変遷と将来像、そしてそれへの提言などをお話されました。大変わかりやすい説得力のある講演でした。

以下、あらかじめ用意していただいたレジメに沿って、講演の模様をお伝えいたします。

\*我が国の総人口の見通し／出生率および合計特殊出生率の推移

日本の総人口の見通しと合計特殊出生率(1人の女性が一生に産む子の平均数)が減少の一途を辿っています。この傾向(少子化・人口減少)は日本に限ったことではなく、遅かれ早かれインドや中国や全ての社会が経験する変化であり、これが「近代化」と言うものです。

\*近代家族とは何か

「家族社会学」の分野では「近代家族」の概念は2つの意味で使われております。1つは、「近代に存在する家族」、もう1つは「近代的な家族=自由で民主的で平等な家族」です。日本においては、それまでは家制度があって家族は近代的でなかったために、「家族を近代化することがファシズムを食い止める道だ」と戦後の知識人は考えてきました。(「近代家族の成立と終焉」1994年岩波書店)

\*「近代家族」の3つの特徴

近代家族論パラダイムが日本に紹介され、「歴史上、世界史上、近代的な家族などどこにもなかった」と言われたしました。専業主婦よりも前に専業主婦が生まれ、その専業主婦を育てるために専業主婦が後から生まれました。前近代社会では7歳ですでに労働力になりましたが、学制が発布してから義務教育に囲いこまれるようになりまして、それから日本では子供は「穀潰し」になりました。また、血縁の人びとが肩を寄せ合って暮らすよ

うになった結果、血縁でない人＝養子、使用人、小姑、甥姪、このような人が家族から排除されて、夫婦と子供からなる家族ができたのは、日本では割合と新しく明治期のことで、欧州でもせいぜい 18 世紀頃からであることがわかっております。

#### \*近代家族の性規範

これを支える規範は、「愛と性と結婚」の三位一体と言うロマンチック・イデオロギーです。愛した相手と結婚してからセックスする「初夜」と言う言葉はもはや完全に死語となり、この規範が解体いたしました。これを性革命と申します。

これが解体すると 3 つのつながりが崩れます。愛と性が分離して性のカジュアル化が進み、愛と結婚が分離して離婚率の上昇となって表れました。結婚と性が分離し（仕事と性は家庭には持ち込まない方もいらっしゃる）、今やセックスは結婚の前にも外にも後にもあるものになりました。

ある社会が性革命を経過したかどうかを測る 2 つの人口学的指標があります。1 つは、離婚率の上昇です。今や米国では 2 組に 1 組が離婚しますし、欧州も高いです。もう 1 つは「婚外子出生率の上昇」で、これが性と結婚が分離した指標となります。北欧やフランスでは新生児の 2 人に 1 人が婚外子ですし、米国では新生児の 3 人に 1 人が婚外子で、驚くべき勢いで婚外子が増えているのに対し、日本では婚外子出生率は微々たるものです。

#### \*少子化の原因＝出生率低下の要因分解

2 つの指標からみて日本は性革命を経験していない非常に安定した保守的な社会のように見えます。しかし離婚率は着実に上昇しており、離婚率の上がり方は諸外国に比べると低いが、代わって驚くべき非婚率の上昇が起きております。2030 年までには生涯非婚者が 3 人に 1 人になると言われております。離婚は 1 度結婚しないでできませんが、非婚は婚前離婚と言うべきもので、結婚・離婚という手間のかかるプロセスを最初から省略して結婚を選ばないことです。これが諸外国と比べて著しく伸びております。それに婚外子出生率が上がっていないので、日本ではモラルが保たれると思いきや、実は婚外の妊娠率は非常に上昇しておりますが、その胎児が闇に葬られていて、その結果、少子化になっているので、婚外妊娠が出産につながれば出生率上昇に貢献するはずなのです。

出生率の低下の要因には 3 つの傾向があります。その 1、結婚しない人びとが増える。その 2、結婚した人でも子供の数が減る。その 3、婚外子が増えない。これまでは、結婚した人は 2 人までは産んでくれていたはずでしたが、この人たちでさえ次第に一人っ子しか産まなくなってきました。

#### \*婚姻率の低下

順番に言いますと、婚姻率は明らかに低下しています。法律婚は全世界共通に低下していますが、日本固有の状況は同棲率＝事実婚率さえ上がらないことです。考えてみれば婚姻率がこのように上昇したのは近代化のお陰で、どんな男性でも妻子を持つ世帯の主になれた。100%に近い全員結婚社会ができたのは 1960 年代でして、それ以前には結婚できない、結婚しない男性がけっこう多かったのです。

#### \*婚姻内出生率低下

結婚すれば 5 人まで子供を産んでいた時代が 1950 年代まで続き、1960 年代の 10 年間に 5 人台から 2 人台までに急減した。2 分の 1 です。出生率半減に要する期間が 10 年しかかかっていない日本は人口抑制の優等生の国で、しかもいかなる政策的誘導も強制もなく、自発的な人びとの選択で出生率低下が起きました。そして、今や子供ができたから結婚するいわゆる「できちゃった婚」が増えています。

#### \*人口減少に介入できるか？

では、婚姻外出生率はどうなのか。婚姻外出生率は婚姻外性行動の関数です。その中で予期せぬ妊娠が確率論的に起きますが、それが闇に葬られているのが日本の現状です。人口減少というのは一人一人の男女が行動した結果が集積して巨大な社会現象になるというもので、何故こういう事が起きるのかを様々な研究者が発言しておりますが、実は理由がよく分からないのです。人口減少への政策的介入、すなわち子供を増やす方も減らす方も政治が介入しても効果がないことはわかっています。子供が減るのは何故だか分からない、要するに複合的な原因がありまして、それが早いか遅いか、ゆっくりか急速か、だけの違いであると。だから政治は介入しない、できないと考えたほうがよいのです。

#### \*人口現象はくい止められない

人口減を前提とした社会設計だとしたら、私たちは人口減少を前提とした社会設計に頭を切り換えるしかない。つまり、近代家族の時代は終焉が来ているのだということなのです。江戸末期の日本の人口は3,000万人。それから約1世紀で1億2,000万人。ゴキブリのように4倍に増えたわけで、ほどほどに減少して7千万程度がちょうどよい適正サイズだという見方もあります。人口減少は、1つは自然減少でもあり、もう1つは社会現象でもあるわけですが、「減った分を外から連れてくればよい」を実践しているのが欧州です。

#### \*出生行動

日本はこの先、人口大国から人口小国へ変わって行くでしょう。インドも中国も遅かれ早かれ同じ道を歩むことになるでしょう。それが「家族」にどのような影響を及ぼしているかを考えてみるに、出生行動上では、結婚はほぼ出産目的になりました。つまり子供を産み育てようとする性的絆だけの関係であれば男女が結婚する動機は著しく低くなりました。

で、1人目はできちゃった婚で産んでくれるが、2人目出産の壁が立ちはだかります。現在のあらゆる少子化対策は2人目を産んでもらう方にシフトしています。女性が2人目を産むか産まないかに立ちはだかる壁は、家の広さ、学歴、有業、無業とか様々あるなかで、一番の要因は1人目を出産した時の夫の協力の有無が大。それと同時にこんなに子供が減っているのに何故に待機児童だけが増えているのか？といえ、一刻も早く仕事に復帰したいと思う女性が不況の煽りもあって増えていると言えます。

#### \*配偶者行動

では、結婚行動そのものはどうなのか。日本では結婚しないと子供を産まない。何故かといえば、婚外子に対する差別が非常に強いからです。結婚願望はデータ上では減ってはいません。ところが婚姻率は激減しております。結婚したい女の条件と結婚したい男の条件がミスマッチをおこしているからです。ミスマッチを起こす主たる原因は、男女ともに結婚観は昔ながらで変わっていないことです。現在、結婚に漕ぎつけた人の中で夫婦の年齢差の中央値を見ますと同年齢結婚が一番多い。これは男に高望みをしない人が早めに結婚しているとも言えます。男性に高い頼りがいを期待する女性たちは高い結婚願望を持ちながら「いい人いないわね症候群」に陥って、一日延ばしに結婚を先延ばす結果になります。これを「なし崩し非婚」といいます。

男性側は男性で、「自分は十分に妻子を養う能力がない」ので結婚に踏み出さない、こういうミスマッチがおきています。したがって早めに結婚がしたければ、このような保守的な結婚観さえ変えさえすれば、お互いに選べるようになるはずですが、データを見ますと、結婚は若い男にとっても女にとっても損、だと捉えられています。男は自由になるお金が減り、女は自由になる時間が減る。これは男が稼ぎ主であり女が家事育児の責任者であるという保守的な結婚観からくる判断です。

#### \*育児行動

育児行動についていけば、子供が何故こんなに減ったかかと言うと、子供一人当たりにかかる費用が激増したことがあります。昔の肝玉母さん達は4人も5人も育てて自信满满、堂々としていたと言われますが、昔の子育ては放任的でコストがかかってないと理解していただききたい。したがって子供とは、非常にコストのかかる耐久消費財となり、子供を持つことがステイタスシンボルになってきました。

#### \*世代間相互関係

子育てを誰が担うかと言えば、核家族が主な日本においては祖母力をなかなか動員できない事情があります。アジア圏ですと世代間相互援助関係があって祖母力を動員できる。しかし、これも近い将来、急速に失われていくと思います。日本の場合は祖母力は母系が強固になってきました。妻方親族との世代間相互援助関係が強まり、そのため父系親族との関係が揺らいできました。そうすると家族はもっと変わっていくでしょう。そしてこの家族の多様化に、それぞれ階層が関係していることがわかります。

#### \*家族の多様化と階層分離

家族はメンテナンスするためのコストが高くなりました。しかし、私は「家族」がなくなるとは思いません。何故かと言えば、昔から「一人口は食えなくても二人口は食える」というように、家族の凝集力はなくなるからです。「片稼ぎ世帯」でSingle income source に頼っていた時代は、考えてみれば近



代のごく一時期に過ぎません。これからは「共稼ぎ」どころか、Multiple income=1つの収入源では充分ではないが、小銭をかき集め肩を寄せ合って助け合う世帯が出現する可能性があります。これを「持ち寄り家計」と申します。

その中で急速に増えているのが単身世帯で、現在、3世帯に1世帯が単身世帯。実は、その単身世帯も中身が分解していて、「おひとりさま資源」を持ち自ら選択して単身世帯になっている人と、望んだわけではないのに余儀なく単身世帯になった人たちとのあいだに分解があります。

#### \*家族一積み過ぎた方舟 (アーサー・A・ファインマン著 上野千鶴子監訳・解説 学陽書房)

ファインマンの著書に邦題を付けたのは私です。このタイトルの implication (含意) は何かと申しますと、家族が積み過ぎていたのは育児・介護と言う重荷でした。この重荷を背負って出航したのが近代家族です。昔は家族に介護力、育児力があつたと言われていますが、それは本当でしょうか？もともと重荷を背負って出航した近代家族は早晩、座礁が運命づけられていたと考えた方がいい。「いや、昔の家族は育児力、介護力があつた」と言うが、昔の育児の水準がどの程度かを考えると、その期間は短く、子は7歳からは戦力となり得ました。

子育てがこのように大変になったのは「少なく産んで大切に育てる」という少子化のせいです。また、日本の年寄りがこんなにも長生きするようになったのはつい最近のことですので、介護負担も嘗てよりずっと重くなりました。前近代では介護期間も介護水準も遙かに低いもので、介護負担は今より軽かったと言えます。

#### \*介護保険は「家族革命だ」

私の関心は介護保険に集中しておりまして、このような近代家族論からみると介護保険は明らかに家族革命であったと言えます。それは何故かと申せば、介護保険は「介護は家族だけの責任ではない、社会にも責任がある」との国民的合意が成立したことを意味するからです。これは日本の社会において大きな変化でした。ケアの社会化への第一歩が踏み出されたわけです。つまりケアは「わたくしごと」ではなくなった、これを脱私事化と申します。では、その逆は何かと言いますと、「わたくしごと化=私事化」です。

今からふり返れば、近代家族というものはケアを家族に封じ込める、すなわちケアの私事化にともない、その専従者=専業主婦という人たちをその中に配当した家族だったと言えます。そういう家族にかつて育児力、介護力があつたというのは全くの嘘で、早晩破綻する運命にあつたことが、今や赤裸々に表面化してきたのが現実だと思います。

#### \*高齢化と家族の変貌

今、家族は急速に変貌しております。夫婦世帯は高齢世帯が増え、夫婦が揃っている間は子世帯と同居しないのが慣行になりました。連れ合いに先立たれた後に子世帯と同居するのを中途同居、あるいは長男以外に同居相手を選択するのを選択的同居と言うのですが、その同居を選択せずに夫婦や一人で暮らす人たちを階層分解してみますと、身も蓋もないことがわかってまいります。

高齢者世帯を「金持ち」「貧乏人」で分けてみますと、経済階層の高い人たちは「選択的別居」を選ぶ傾向があります。他方、貧困層もこれまた別居率が高く、子供が自分たちの生活で手一杯で親まで手が回らない「姥捨て別居」だということがわかります。中間層だけがいわゆる渋々同居をやっているのでしょう。また超高齢化の中では子供に先立たれる高齢者も増えてきます。80歳代、90歳代になると高齢逆縁が増えてきており、長男に先立たれた後、次男と同居する「繰り上り当選」、あるいは子供に先立たれて孫世帯と同居する「中抜き世帯」など、ありとあらゆる形態の同居が増えてまいりました。かつてのような三世同居は神話化しつつあります。

#### \*家族に法的介護責任はない？

家族に本当に法的責任があつたのかと言うと、扶養義務は明文化されていますが、介護義務はどこにも記されておられません。したがって手も足も出さない家族に誰も介護を強制できません。

#### \*家族に介護能力はない？

では、昔の家族に介護能力があつたかと言えばそれは今や「神話」であることが専門家の間で常識になってきました。何と申しても高齢者が今ほど多くない、子供が多いのでリスク分散が可能、寿命が短いので要介護期間が短い。介護水準も昔だったら寝たきりならば褥瘡があつて当たり前でした。今は褥瘡を作ったら質の悪い介護と言われます。家族介護の負担がこれほど重くなったのは歴史的に新しい現象であることがわかってきました。

#### \*要介護高齢者の登場

要介護高齢者とは介護保険制度成立前には存在していない概念でした。このような人たちが大量に登場し、かつその期間が長期化していくという、歴史上誰も経験したことのない時代を私たちは迎えています。

### **\*介護外注への忌避感**

このように介護を家族だけで担って行くことは最初から無理なのですが、介護保険も最初の頃は介護を他人の手に委ねることに非常に大きな抵抗感がありました。これも介護保険の経過と共にあつという間に権利意識に変わってきました。その点では家族介護が絶対であった時代から第三者の有償の介護を家族が利用してもよいのだという大きな意識変化を、短期間に引き起こしたと思います。

### **\*家族介護の現実**

家族介護はこのところ急速に変わってきておりまして、先ずトップに来るのは配偶者です。夫、妻に限らず生きていれば先に倒れた方をあとの配偶者が世話をすることが当たり前になってきました。したがってその結果、今家族介護者の男性比率が28%、3割近くに増えています。娘の場合は嫁いでも実家の親の介護に通うケースです。さらに、息子介護が増えてきております。これは男性の非婚率が高まり、親と同居するケースが増えたからです。この人たちの中には（親の）年金パラサイトもあり、高齢者虐待の温床になってきています。

### **\*家族介護の質は高いか？**

家族介護が理想なのかと言えば、家族は介護の素人ですから質が高いとは言えませんし、過去もけっして高かったとは言えません。日本で介護保険制度ができて、これは歴史上初めての経験でしたが、その経験を蓄積して参りました。

今や高齢化しつつある全世界が日本の介護保険制度の帰趨に注目しています。この介護保険が持続可能な制度になるかどうか、とりわけ日本よりも早いスピードで少子高齢化を経験しているアジア圏の諸国＝韓国、台湾、中国、そしていずれインドがそこに参入すると思いますが、それらの国の人たちが非常に熱い期待を持って見えています。

ドイツが介護保険のお手本であると言われておりますが、日本の介護保険はドイツの制度とは似て非なるものです。そういう意味でも世界のユニークケースとして、どのようにして介護を社会化して行くかが問われています。

### **\*そして、どこへ？**

その半面、日本で非常に問題なのは、育児の社会化がなかなか進まないことです。子供手当は創出されましたけれども、待機児童数はなかなか減りません。子供を預かってくれるところが増えないからです。性革命が始まった1970年代以降から今日に至るまで約40年の間、核家族における孤立育児の状況は少しも改善されておらず、若い母親たちは育児の重荷に喘いでいます。それどころかひとり親世帯が増え、今や乳幼児の子供さえも離婚の抑止力になりません。ひとり親世帯の子育てはもっとも困難な状況を経験していますが、社会が全く手を差し伸べようとせず、かえって親を責めるだけです。このような状況の下で子供が産まれてくるはずがありません。したがって、少子化が進むのは当然であろうかと思えます。

結論に入りますが、もはや覆らない少子化を前提とした社会設計を立てるしかありません。その時には、原則として家族はあってもなくてもどちらでも、おひとりさまを前提とした「おひとりさま仕様の制度設計」へ転換して行く必要があります。

その前提になっているのは、日本の社会全体にもはや成長が望めないという現実です。それを停滞というか成熟というか、そこは言葉の綾ですが、成熟社会へのビジョンを持ってくるしかありません。その点では、高度成長期以来80年代まで日本社会を牽引してきた成長モデルを完全にシフトする時代が来たと思えます。その兆候が「家族の変貌」の中に、もはや覆せない現実として表れていると言うのが私の認識です。

そこではこのような家族の多様化＝家族を持てる人と家族を持たない人、選んで家族を持たない人、余儀なく家族を持たずにおひとりさまになってしまう人、このような多様化がその人の様々な資源や経済力格差で生まれていると言えます。そこで生まれる経済力格差をこの市場経済の社会の中では防ぐことは出来ませんが、そこで発生するリスクを再分配することは可能ですし、必要です。

格差OKではなく社会連帯へ向かうビジョンの設計が是非とも必要だと信じております。そう考えて「世代間

連帯」(上野千鶴子・辻元清美著、岩波新書 1193)を書きました。

「おひとりさま仕様」を前提に社会を組み替える、そのような社会を生き抜く知恵として『おひとりさまの老後』という本を書き、「男はどうすればいいの」と聞かれたので『男おひとりさま道』を書きました。

私の話はこの辺りでいったん終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

## 次いで、発言者お3人のお話に移った

### 楊逸さん

私は、人生の半分即ち 22 年間で中国で、後の半分の 22 年間で日本で過ごしています。来日して感じたことは、同時代を過ごしている人間なのに決して同じ時間を過ごしたわけではなく、自分はどんな処でどんな時間を過ごしてきたのかとあらためて考えました。

来日する 22 歳まで暮らした中国での生活は、一言で言えば原始時代のような生活でしたが、家族について思いを巡らすと、取り巻く社会はうまく行っていなかったが、我が家族はうまく行っていた気がします。

2010 年 10 月末、「美味しい中国」が刷り上がって来た時にそこに収められている家族写真を目にして泣きたい気持ちになったのを今でも鮮明に覚えています。と言いますのも、あの原始時代のような暮らしの中であって、写真の家族は実に幸せそうな表情だったからです。今までの写真は余りにも小さくて顔の表情まで分からなかったのですが、出版を機に引き延ばされることにより表情が浮かび上がってきたのです。



私個人の体験からすると原始時代のような昔の生活の特徴は不自由、何をすることも不自由でした。数字的裏付けは何もないのですが、その当時の中国の結婚率は 90%位だったと思います。女性は 24 歳を過ぎると、「未だ独身?」と言われ、惨めで恥ずかしい存在で、かつ大人として認められてない。おばあちゃん達からは「可哀想に。誰かいい人はいないのか」と縁談話があちこちから来たりします。政治的には厳しい時代でしたが、人間的にはある意味においては他人のことも放っておかない暖かい社会ではありました。では離婚に関してはどうかと言いますと、政治体制上、共産党の許可が必要でして、なかなか離婚は出来ない状況でした。そうしますと離婚率は抑えられるわけです、中国にいた時分に自分の周りで離婚をした人は余りみかけませんでした。しかしその後、急に離婚率が上がったという記憶がありあます。

ただ、それだけでなく協力社会でもありました。男女協力しないと生活が成り立たない。特に東北部に住んでいたので、煮炊き用だけでなく暖房にも薪や石が大量に必要で、それを運ぶためには男性の力が必要です。今の日本では考えられない様な生活です、まるで無人島にいるようなもの。何から何まで一人でやらなければならないみたいでした。便利じゃなく不自由な社会。周囲は力仕事で満ちあふれ、例えば豚肉を買って来るにしても骨付き肉しかありません。冬ともなると凍ってしまい女性の力では切ることままならない。じゃ～男性は力があるから一人暮らしでも平気なのかと言うとそうではない。当時は人民服でしたが、既製の物はあるにはありましたが非常に高価で、当時の月収ほど。家族全員の外出着は 1 着だけという家もありましたし、現に我が家では私が高校を出る時くらいまでは、下着からセーターまで着る物は全て母の手作り。靴も冬物、夏物ともに布を重ね合わせて作ってくれました。そうなる裁縫などでは男性は苦手が多く、そのような社会状況下ではそれぞれが役割分担をしないと生きていけない。不自由は決して好ましくはありませんが、否応なしに協力社会をつくることになります。それは無理矢理ではあるけれども、不自由が家族の存在、男女の協力などの必要性を高めることになった気がいたします。

上野先生が講演の中で、結婚における愛とか性とかの問題をあげて分析しておられましたが、そうではあったかも知れませんが、その時の中国ではそのようなことを余り考えもせずひたすら日々の生活に追われておりました。毎日、どうやって生活しようか、服や靴を誰か作ってくれないか、食事をこしらえてくれる人がいればいいのというレベルの願望です、近代的な家族と言えるようなものではありませんでした。そのような中で多少とも生活が向上して新しい服が年 2 回くらいは買える時代になった頃、私が 22, 23 歳になった頃でしたが、来

日しました。

飛行機から降り立って感じたことは、「便利で安全で、なんと素晴らしい国なのか」が正直な感想でした。駅や道角に自動販売機。それを誰も強盗しないことに感動すら覚えました。何故って、その機械の中にはお金が入っているんですよ。なんて大胆なと思いました。それに喉が乾いたら水道水ではなくお金を払ってそれを利用する。日本の若者は当たり前のように喉が乾いたら自販機で夏なら冷たい飲み物、冬なら暖かい飲み物を買う。なにも奥さんに遠慮しながら「お茶・・・」などと言わなく済むわけで、大げさに言えば結婚なんかしなくてもこと足りる。因みに私が嵌っていたのは「お汁粉」でした。

しかも、あの頃の中国では、男性と並んで歩いただけで噂が立ちましたし、ふしだらな娘のレッテルが貼られることになるので、男性とは距離をおいていましたが、だからと言って一生独身でいようという適齢期の娘は、私の周囲にはいませんでした。しかし日本では中国と違って男女で歩いても噂になるようなことはなかったですし、人の目を気にしないでお付き合い出来る環境も羨ましいし、いいですね、私もたまには・・・今はおひとりさまです。

私は、「自由と不自由はいかなる関係なのか」について考えます。

来日して思ったことは、日本は自由社会ではあるが資格社会でもあるわけで、中学校の先生から聞いた話では、今日本では中学卒業しただけでは社会が受け入れてくれない、アルバイトでさえも難しいとのこと。お金をかけて教育している割には、学力が向上していないのではないかと。高度成長期までの小学生の学力の方が今の中学生よりも上回っているのではないかと、その当時の中学生は今の大学生くらいの学力があったのではないかとさえ思います。社会が進歩すると長い時間お金をかけて教育しても形式的に学歴を見るようになり、その人の実力を見てはくれない。

そのような中で、例えば介護の問題にしても資格が必要です。保育にしてもベビーシッターにしても資格が必要です。しかし子育て経験のある隣のおばちゃんなどは下手な保母さんよりも資格はなくても能力を持っているわけですし、そのような潜在的な能力を如何にして引き出すかが必要なのではないかと、私は思いました。

### 岩田クリスティーナさん



私は旧西ドイツのベルリン生まれのベルリン育ち。研究者としてではなく長くドイツに暮らしていた者の視点からドイツにおける家族とはどういうものなのか、どう変化してきたのかに重点を置いて話をいたします。日本との違いを知りたいとのことですが、違いは勿論ありますが、むしろ共通点の方が多い、特に旧西ドイツでは。

ドイツでは日本と同様に戦後は「男性が稼ぎ主、主婦そして子供」の家族考が一般的でして、今もそれが残っています。もう一つの共通点は日本同様「三歳児神話」が根強く、三歳以下の子供を預けるのが困難でして、働きたくても働けない女性が多い。学校も午前中で終るのが一般的で、主婦を前提とした学校制度です。しかし現在、それでは間に合わなくなってきました。父親だけの稼ぎでやっていけない家庭が増えているし、フルタイムで働きたい女性も増えています。また少子化の影響で行政側も女性を労働力として認識するようになり、終業時間を延長している自治体が増えていますし、三歳以下の子供を預かる場所も増やそうとの動きも出てきてはいますが、まだまだ充分ではない。三歳以下の待機児童状況に限って言えば、日本の方がいいと言えます。日本では数は未だ充分ではないにしても、あることはあるし質も高いので子供を預けることが出来た親は、私もその一人ですが、非常に有難い。

先ほども申しましたが、旧西ドイツは日本と非常に似ていますが、旧東ドイツはかなり違って、共働きが当たり前、一歳未満で保育所に入れるのは当たり前でして、その辺りは中国と共通しているかも知れません。統一してから20年経た今でもそのような違いは残っていて、旧東ドイツでは待機児童の問題はそれほど深刻ではありません。

ドイツでは日本と同様、「親と子からなる家族」が一般的ではあるが、家族の中での変化がおこっています。働

く女性が増加したことで、父親の育児参加が強く求められています。3年ほど前に法律が改正されて育児休業の取得率が上がり現在は2割を超えています。それは育児休業中も給与の7割弱が国から支給されるからだと思われます。ほとんどの場合は母親の方が長く休業しますが、逆のケースもあります。

私の感想ですが、現在のドイツは日本と比べて、「家族の定義が広い」と言えます。日本では出来ちゃった婚が約3割と多く、それは「家族は夫婦と子供からなるもの」の考えが強いことを意味しています。勿論、片親世帯も増えてはいますが、その原因のほとんどが離婚によるもの、つまりネガティブな要因によるものです。結婚しないで同棲のまま子供をつくるのも珍しくなく、このようなパッチワーク家族が増えていきますし、そういった家族形態がもはや当たり前になっている。

結婚離れについては、統計上では日本と同様多くなっているかも知れませんが、結婚してなくても子供を産む人は珍しくありません。ドイツも少子化大国ですが、結婚離れが原因ではないようです。政治家などの認識は、一般人のそれとは離れていることが多いのですが、これに関しては保守党の政治家でさえも、「家族は育児がなされている場」と定義をしています。

1つの例として婚外子を取り上げてみるに、2005年のデータですが、ドイツ全土において婚外子の新生児は3割近い。最近のデータは入手していませんが、この数字よりも確実に高くなっていると思われます。そして数字は地域によって大きな違いがあり、旧東ドイツの北部では62%近くが婚外子です。逆に西ドイツの南部では2割前後と国内でも大きな違いがあります。考えられる要因は、婚外子でも法的地位は同じことでしょうか。それは「子供は、親が選んでいる暮らし方によって差別されてはいけない」との意識があり、言い替えれば、「家族」が社会の最小単位ではなく「個人」であると言う考えが基本で、婚外子でも嫡出子と同等の権利を有しています。

ドイツの場合、同性婚は10年ほど前に可能になりました。その結婚は法的にもほぼ男女婚と同じですが、1つだけ大きな違いは、養子を取ることが出来ないことです。

パワーポイントの「ベルリンでは家族が家族に見えなくても大丈夫」をご覧ください。このロゴが入った女性同士のカップルが子供を抱いているポスターが、ドイツの主要な新聞ベルリン・モルゲンポスト紙の広告欄に大きく掲載されていますし、駅にも貼り出されています。朝日新聞がこのようなポスターをデカデカと掲載するでしょうか？同性カップルと子供からなる家族は、ドイツでもまだレアケースですが、家族の多様化はかなり進んでいることは確かでしょう。しかし、家族のこれからについては、私には何も言えません。

### **アミット・バクシー（新美彰規）さん**

私の好きな映画で「ストレイト・ストーリー」をご存知の方はいらっしゃいますか？これは1994年にニューヨークタイムズ誌に掲載された実話を基にして描かれたロードムービーで、アイオワ州ローレンスに住む73歳の老人が、時速8kmのトラクターに乗って、ウィスコンシン州に住む病気で倒れた兄に会いに行くまでの物語です。その映画の中で老人と一緒に住んでいる娘に「家族って何か？」と聞かれて1本の木の枝を娘に「折ってみろ」と渡す。折れた枝を指し「これは一人での時だ」。次に3本の枝を渡して「これを一気に折ってみろ」。しかし彼女は折ることが出来ない。そこで老人が「これが家族というものだ」と言うシーンにとっても感動したのを覚えています。



本日のテーマが「家族」ですので、インド人の父親のことについてお話をさせていただきます。私の生まれは愛知県半田市ですが、私が11歳の時に3つの言葉を口にしたばかりに単身で海外留学させられる羽目になりました。「しかたがない」、「しょうがない」、「関係ない」。この言葉を父親が聞きつけて激怒。1つ目の「しかたがないとは何事か！ 問題解決のための仕方はいろいろある」。2つ目の「しょうがない」には「冷蔵庫に行けば生姜はある」。3つ目の「関係ない」には「家族なのだから関係はあるだろう」。ひっぱたかれましたね。

飛行機から留学先のニュージーランドの地に降り立って直ぐに文化の違い、言葉の違いに凄く驚きまして、着

いたその日にホームシックになりました。現在でも、「一人ではやっていけない、日本に連れ帰ってください」と泣きながら土下座をして親に頼んだのを覚えています。しかし、親は到着後直ぐに私を置いて日本に帰って行ってしまいました。母親は涙しながら背を向けて行ってしまい、その時は親に裏切られたと思ったものです。

しかし、後年知ることとなった当時のいきさつは、「この子は一人では無理だろうから日本に連れて帰ろう」と言う父親に対して、日本人である母親は「今ここでこの子に手を差し伸ばしたら立派な大人に成長できないだろう」と身を切られる思いで置いて帰ったのだそうです。

しばらくして、当時のNZの教育水準が低かったこともありまして、父親の母国インド行きを希望し、インドではインターナショナルスクールに入学しました。そこは「自由はあるし責任はない」場所で、随分と好き勝手な事をしてしまいました。ピアスはする、髪は染める、飲酒や喧嘩と一通りやることはやりました。見かねた父親は、私のこれまでの行状を論してもらうためにインドに住む祖父のところに連れて行きましたが、祖父の口から出た言葉は「私も若い時はピアスをしていた。若い時は右脳の方が重いのでピアスは左耳につけるとバランスが取れていいんだよ」と訳のわからないことを言って、こっちは叱られると思い込んでいたのに逆に褒められて、正直びっくりしました。父親は祖父から私を説教するように頼んでいたのですが、説教するどころか金庫からピアスを取り出して「若い時に使っていたものだが、使ってくれ」と差し出すのですから、全く当てが外れたわけです。その祖父が父親に言った言葉を今も忘れられない。「子供は親に迷惑をかけていいんだよ。ず～っとは迷惑をかけては生きていけないのだから」。

最後に、老人の方々は国のタカラです。皆さんの知恵をどうやって次の世代に繋げて行くのかを我々20代、30代の世代が考えて行かなければならないと思っております。

## 意見交換(発言順)

### 上野 千鶴子さん

楊さんのお話の中で「不自由な時代の家族が幸せで、自由になるとそうでないかもしれない」とありましたが必ずしもそうではないでしょう。いつの時代にも幸せな家族とそうでない家族があると思います。もっとも昔は助け合わない生きていけなかったこともあります。反対にイジメや監視のある社会でもありました。近所のおばさんが育児力になるというお話も、最近では日本でも祖母力が見直されてきています。しかも血縁ではない関係の中に失われた家族の機能を創成しようとするNPOも誕生。名付けて“グランマ大作戦”、掲げる標語は「遠くの祖母より近くのグランマ」というものです。

それにつけても、子育ては家族だけではできません、ましてや母親一人ではできません。私はアミットさんの話を好青年だな～と思いつつ聞いていたのですが、この方が11歳の時に子離れを決断した親が本当に偉い！と思いました。今、30代、40代の子どものパラサイトを許している日本の親たちを考えると、11歳の時に子供の将来を思い量り、子離れの決断をし、実行した親は立派です。泣いて土下座する子より、親の方がきっと身を切られる思いだったでしょう。しかも見守りながらも節々にちゃんと介入し、子どもを託す大人たちを次々に選んで行ったというのは見事です。現在、日本で11歳の子供を手元から離せる親がどのくらいいるのでしょうか。他方で、0歳児を手放し、見捨てて殺している親もいますけども。いつかは必ず「親離れ・子離れ」をやらなくてははいけません。映画「ストレイト・ストーリー」の例を挙げて、1本の枝は折れるが3本の枝は折れない、と言うお話が出ましたね。家族の結束を称える美談ですが、実際にはレアケースです。

実際に家族研究をしておりますと、内部に困難を抱えた家族は結束するよりも、より多く壊れます。障害児を抱えた家族は離婚率が高いですし、要介護者を抱えた家族はストレスを高めます。子どもの不登校や問題を抱えた家族は、その中に生まれた異物を排除するか壊れるかです。困難に直面して結束する家族は少ないからこそ美談になるのです。実際には家族はそのように脆いものなのです。そういう現実を前提にしたうえで、「家族の絆」は素晴らしいものであるが、めったに生まれられないものなのだ。そのことはここで言うおきたいと思いました。

岩田さんのお話を聞いて感心したのは、「育児がなされている場を家族と言う」。素晴らしく分かりやすい定義ですね。これに介護は入りますか？そこのところを聞いてみたいです。「育児・介護がなされている場を家族」と定義して、政策的な保護を与えるってことを選択するような政策なら、素晴らしいことだと思います。育児・介

護がなされている場ならば、血縁があろうがなかろうが、パートナーが異性であろうが同性であろうが家族なのだ。そして、その基本にあるのは個人が最小単位であるということですね。近代家族が壊れたことを認めないと、社会はそうはなりません。日本の社会がなかなかその方向に行かないのは、近代家族が壊れて機能しない、これ以上続かない現実を、未だに政治も社会も認めてないからでしょうね。

私はよく「家族破壊者」と言われますが、それは買いかぶりです。私ごときの力で家族は壊れません。どうぞ、誤解しないでください、家族が壊れたのは私のせいではなく、抗いがたい歴史の大きな変動のせいでここまで変化したのです。家族が壊れたことを前提に「では、どうすべきか」を考える時に来ていると思います。

### **楊 逸さん**

家族について考えてみるに、上野先生もおっしゃったように、家族だけではなく、家族と社会との関係性の中にあると思います。不自由な時代に我々は決して幸せではなかったし、結婚も今から考えれば必須ではないのですが、あの当時は生きて行くためにはそうせざるを得なかった。愛がなくても結婚を方便としていた部分がありましたが、来日して感じたのは、自由で選択肢が沢山あることです。愛がなければ結婚しなくても一人で生きて行く道もあるし、人間らしく生きて行ける。そして、結婚は生きて行くための原始的なものではなくて、もっと文明的な象徴として愛や暖かさのある進化したもので、もしそれがうまく行かなくなった場合は自分の意志で離婚も出来る。中国ですと共産党の許可が必要でしたので、日本は進んでいるなと思いました。

比較して、日本の方たちは出来るだけ「人に迷惑をかけない」と思っている方が多いですね。でも、それが個人と家族、個人と家族と社会との関係が希薄になっていく原因と考えます。人に迷惑をかけないでなるべく自分でやろうとする人が多いですね。既婚で子供もいる同年齢の友人の例ですが、遠くに離れて暮らす実母と祖母のところに家事をしてくれる家政婦さんが来る日は、あらかじめ掃除をしてからでないと落ち着かない。他人様が家の中に入ることに精神的な負担を感じるわけです。これって不思議です。東南アジアも中国も香港も家政婦さんを雇うことが一般的でして、精神的な負担は感じません。香港などでは、家政婦さんのなり手がなくて、よその国から輸入するくらいです。育児や介護の分野では日本のように資格を必要としないので、費用もそんなに高くありません。

日本人は人になるべく迷惑をかけたくないとのことから、問題を抱え込んでしまうのではないかと。私は個人と社会との関係は、「迷惑をかける」ところから始まると思っております。ありがた迷惑と言う言葉もありますが、人間関係は迷惑から始まって、少しずつ理解していくようになるんじゃないでしょうか。何もかも自分で抱え込んでしまうのではなく、日本人はもう少し「いい加減さ」があつていいのではと考えます。

### **新美彰規=アミット バクシーさん**

「家族」については、インドは多分中国よりももっと遅れています。人口も2030年には中国を抜くと言われてます。出生率も下がってはいるのですがまだまだです。しかし、経済が家族環境を変えていくのが周りの友人達をみていて分かります。離婚も目立ってきましたし、これからも変化し続けるでしょう。ただ、日本と比べて財閥解体がなかったのも、ある一族が国内総生産の数パーセント、零コンマではなく数パーセントを占める現実がありますから、そういったファミリーでは古くからのしきたり、それは政治的なことや金銭的なことでもありますが、いまだにその中に在ります。



余談になりますが、インドでのビジネスは家族中心で行いますので、インド人を相手にビジネスをする場合は家族同士で付き合いの方が成功すると思います。日本では裸の付き合いといいますが、それをインド人に対してやると別の意味に取られますので、それだけは気をつけてください。

### **岩田 クリスティーナさん**

ベルリンの壁がなくなったのが1989年で統一は90年ですので、丁度20年になります。ベルリン市は別として東西の差は今でもかなりあります。失業率は東側がうんと高いので、優秀な人は西側に流れ、ますます状況が悪化しています。家族について申せば、未婚での出産は何故か東の方が多いです。出産年齢は東西に別れていた時

の統計では東の方が低かった。そして統一して出生率が下がってしまいましたが、それは将来の不安からくるものでして、今では東西の差はありません。ただ、結婚か非婚の違いがあります。その理由は私にはわかりません。先ほど、上野先生から「育児がなされている場が家族。とは素晴らしい。では介護は？」とのお話がありましたが、持ち時間の関係で介護の話まで及びませんでした。ドイツでは育児休業は3年取得可能です。その内の14ヶ月は国が給与の70%負担してくれるので、父親の取得率が上がりました。

ところが、介護休業制度を導入する案には批判が出て、未だ成立はしていません。育児休業の場合は女性の取得が多いのですが、男性も増えています。しかし、介護休業となると日本と同様、圧倒的に女性の方が多いです。それは、仕事を急遽休むとなると女性の方が多くなるのではないかと思っています。そうした場合、女性は育休の時に何年か休み、更に介護で休むことになり、現場復帰が難しくなるし、その間の給与や年金の保障などを国が負担できるのか等々の問題もありまして、また介護休業を導入するってことは、介護を家庭に戻そうとすることである、との批判もあがっています。従って、育児も介護もそうすっぱりと綺麗に解決できる問題ではないと思っています。どちらも楊さんが仰られたとおりの、「迷惑かけるところから家族がはじまる」のだな～と思いました。

最後に、**会場との質疑応答の時間**となりました。数々な質問に対し、講師の方々からのユーモアに満ちた、的確なお答えをいただき、会場の皆様は大変に満足げな様子でした。

シンポジウムはお陰様で、大成功裡に終えることができました。 (学術文化委員会委員長 佐野 幸子)

## われら港ユネスカン！

### 都立三田高校 ユネスコ委員会 街頭募金報告



私たちは都立三田高校ユネスコ委員会です。

三田高校はユネスコスクールとして長い歴史があり、ユネスコ委員会では年間を通して様々な活動を行っています。主な活動には文化祭でのユネスコバザーや世界寺子屋運動のための書き損じはがき集めなどありますが、三田高生や保護者の皆様、先生方の協力で毎年大きな成果を上げることができています。

さて、今年3月11日に東日本を巨大地震と津波が襲いました。いつもは海外の発展途上国を支援している私たちですが、今度は日本のためにも何かしなければと思い、初めて街頭募金を行いました。

募金箱を作り、のぼりを作り、4月の21日、22日の放課後に三田国際ビル前で募金活動を行ったところ、2日間で52,886円もの義援金が集まり、全額日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども募金に寄付することができました。

私自身、寄付をしたことはあっても、集める立場になったことはなかったので、集まるのか不安でした。しかし募金をしてくださった方の中には、わざわざ車を止めてくださった方がいたり、道路の向こうからこちらに渡ってまで募金してくださった方も大勢いらっしゃいました。また、外国の方も何人か募金をしてくださいました。そんな方々の厚意に深く感謝すると共に、このユネスコ委員会の活動に大きな誇りとやりがいを感じました。

今回の地震だけでなく、困っている人たちのために何かしたいという思いは誰もがもっているはず。そんな思いを実際に行動に移せるこの委員会で活動ができることを本当にうれしく思っています。これからも三田高校ユネスコ委員会はもっと多くの方と関わり、活動の輪をより広げていけたらいいな、と改めて感じました。



(三田高校ユネスコ委員会委員長 喜多原 綾香)

## 2010年度第3回国際理解講演会

## 「私の国 ブルガリアの素顔」

講師 マルコバ・カテリナさん



日時：2011年3月4日（金）午後6時30分～8時40分

会場：港区生涯学習センター305号室

## 「はじめに」

マルコバさんの活力溢れる楽しい講演に元気を貰ったちょうど1週間後の3月11日、東日本大震災の巨大災害が起こり、福島原発の不安も続いています。そんな日々にあって、この講演記録を記しています。

## 「講師の略歴等」

ブルガリア7番目の都市スリヴエンの出身で、国立ソフィア大学日本語科を卒業後、2000年に来日され、北海道大学、東京外国語大学の研究生を経て、青山学院大学修士課程修了、現在は国際基督教大学比較文化研究科後期博士課程に在籍中です。「許しの宗教」を論文のテーマとして研究に取り組まれています。同時に、日本全国で200回を超える講演活動を重ねられ、ブルガリアと日本の交流に尽力されています。当港ユネスコ協会の会員でもあります。明るく元気で、気遣いの達人。日本語の語彙力の高さに、驚かされます。著書に「ブルガリアン・ブルー」（2010年1月恒文社刊）。

## 「講演の概要」

マルコバさんの母国語での挨拶「ドーバルデン！」で、スタート。会場全員で「どーばるでん！！！」  
「ブルガリアと言えば、ヨーグルト。M乳業のおかげで有名になっている。大関琴欧州。バラ。ブルガリアの素顔はどこを見れば出てくるか？いろいろな側面から見てみたい。」と、まずは、クイズ形式で、趣向を凝らしたブルガリアの紹介が始まりました。

- ① 位置的には、東北地方とだいたい同じ
- ② 面積は、北海道と同じ
- ③ 人口は、750万人で 北海道と同じ
- ④ 多民族国家で、ブルガリア系ブルガリア人が人口の85%、トルコ系が9%他
- ⑤ ユーロ加盟国であるが、通貨はレバ
- ⑥ 隣国と友好関係にある。
- ⑦ ブルガリアと日本は 外交関係復帰 2011年で52周年



## 続いて、ブルガリア語の10分講座

ブルガリアの文字は、キリル文字（スラブ世界34カ国がキリル文字。モンゴルも、キリル文字）。  
携帯でおなじみの顔文字 絵文字 の「トホホ」は、キリル文字とのこと。身近なところで、キリル文字に触れていることを知りました。

ブルガリア語の挨拶 「ドーバルデン」 =こんにちは。笑顔で挨拶するのがポイント。もうひとつのポイントは、キスせず、握手すること。少数民族の多民族国家だから 挨拶の仕方は大事との説明でした。

全員で発声。「ブラーゴダリヤー（最後 上がる。）」=ありがとう。

「ドウイージダネー（真ん中が上がる。）」=さよなら。

「ドーバルデン アズ スム\*\*\*\*」=こんにちは。私は、\*\*\*\*です。

「プリヤロノ ミ エ」 =宜しくお願ひします。

会場中、講師のリードで ブルガリア語の挨拶を交わしながら、暖かい和やかな空気が流れだしました。

次に、「ブルガリアの素顔を国旗の色で探る。」とのテーマで話されました。

ブルガリアの国旗は、横ストライプで、上から、白・緑・赤です。

### ① 白は、平和を表します。

ブルガリアと平和に関して、一番最近の話題は、1989年のソフト革命です。ブルガリアは一人も血を流さず、共産党が自ら降りる形で革命が実現しました。（新聞の初刊号（0号）を手に入れるために行列したこと覚えている、と、スライドで説明されました。）2004年NATOに加盟、2007年EUに加盟。国会議事堂の上に、共産主義時代は赤い星があったのが、現在は国旗があることを、スライドで紹介されました。1944年に、おじい様が共産党に殺害され、お父様の家族全員国の敵とされた等々、当時の共産党下でのご家族のご苦勞に触れられました。

現在のブルガリアの課題として、一人当たりのGDPが少ないこと、経済成長率が低いこと、失業率が高いことを挙げられました。

### ② 緑は、豊かな自然

気候、植物・動物も 緯度が近いと、日本と似ています。

温泉の数は、面積割合で世界3位。治療のために3、4週間の長期、温泉に滞在します。

ミネラルウォーターは、帝国時代から。

四季があり、年間200万人以上の観光客がブルガリアを訪れます。夏が最盛期です。

バラ祭りは、日本からの観光客が一番多い、と言っても1万人。

梅雨はなく、湿気も少ない。秋は、ワインが美味しい。

世界自然遺産であるドナウ川流域の湖 スレパルナ地区が有名です。

### ③ 赤は、勇気と歴史

ブルガリアは、約1350年の歴史があります。旧ブルガリア人（モンゴル系）と、スラブ人が国を作りました。旧ブルガリア人が現在の地に移動する以前、トラキア文化が栄えていたので、古代トラキア人の血が今も流れています。

東ローマ帝国時代の円形劇場、マダラの騎士像、リラの僧院、ボヤナ教会、独自の正キリスト教文化、教会の中の独特なフレスコ等々、世界文化遺産を含む数々の歴史と文化をスライドで楽しませていただきました。世界文化遺産・世界自然遺産の数は、バルカン半島でトップを誇るとのことです。

「ブルガリアの伝統を再発見」のテーマでは、①体に優しい食文化の紹介 ②ブルガリアの不思議な祭り

③バラのある日常生活 ④民謡のプレゼントと、盛りだくさんなお話しとデモンストレーションでした。

#### ① 食文化の紹介

毎日、サラダを食べています。チーズ・トマト・キュウリの国旗の3色があるショプスカ・サラダです。ヨーグルトはほんとに体にいいのか？ロシア人が現地調査した結果、長寿が証明され、「80歳新婚でハネムーンベビーあり」との話しを、今でも良く聞くとのこと。ブルガリアのヨーグルト菌は、お腹の中でも生きています。

ブルガリア人は酸っぱいヨーグルトが好きで、飲むヨーグルトです。日本のものと違ってブルガリアの飲むヨーグルトは、砂糖は使いません。ぶつぶつが残らないようにフォークで良く混ぜます。手先ミキサーで良く混ぜる。500ミリのヨーグルトに水を混ぜる。これに、何かを混ぜる。どう言う味になるか？と、講師手製のブルガリアヨーグルトを試飲させていただきました。

主食は、パン。魚介類は、鯉、鱒、ムール貝等で、スパイス、ハーブをきかせた料理です。ほとんどの料理に使われるとのチュブリツアを、海老せんにつけて試食させていただきました。これは、日本でも入手できるとのことです。

ラキアと言うブドウの蒸留酒や、白ワイン・赤ワインも お勧めだそうです。

ブルガリアは、野菜料理が多いのは何故か？それは、断食の文化があるからとのこと。ブルガリア正教では、年間200日近く（金・土、クリスマス前及びイースター前は長く）、植物性のものしか食べられない。

イースター前の断食の期間は、家族と過ごし、お酒も飲みません。共産主義時代から守らない人が多くな



ったが、最近、健康のために断食を見直し、ブームになっています。

## ② ブルガリアの不思議な祭り

3月1日に「白と赤」を体につけて春を迎える行事があります。白と赤で作ったマルテニツアで春を迎えます。手につけるバージョンは、1年健康でいられるようにとのお守りです。

断食最初の日曜日は、1年に一度の「許しあう日」です。許しの日曜日は、普段教会に通わない人も教会に行きます。イースターの48日前の日曜日、お互いに許しを求めあうもので、すごくいい習慣と思います、とのこと、講師の研究論文のテーマの源を知ることができました。断食は、体も心もきれいにする大切な行事と紹介されました。

2月14日＝ブドウをワインで育てる日。ブドウ畑に出て、ワインを注ぐ祭り。

バラの収穫祭＝バラの谷に近い地域の祭。百何十キロもバラ園が集中している。バラが見えなくても近づくだけでバラの香りがする。6月初旬の3週間ほど。前掛けと後掛けバラ祭りのときの民族衣装で講演いただき、収穫祭の臨場感を味わうことができました。

## ③ バラのある日常生活

これだけバラを植えて、何に使っているのか？ 観賞用ではなく、香りが目的とのこと。ここで、その香を会場で楽しませていただきました。ダマスク・ローズ という種で、バラ水を肌につけて香を楽しむそうですが、中には飲む人もいるとのことでした。気持ちの良い香りに癒されます。



ローズオイルや、ローズジャム、ローズジュース、バラ酒もお薦めとのこと。

## ④ 民謡のプレゼント

最後に「カテリノ・モメ」を講師の歌唱指導の下でブルガリア語で合唱しました。

「カテリナ あなたは なぜ こんなにかわいいのでしょうか？」という意味の歌だそうです。

試飲・試食・実演・スライドを駆使しての、パワフルなご講演に、時間がたつのがあつという間でした。

## 「質疑応答から」

多数の質問が出て、ひとつひとつに丁寧にお答えいただきました。その中から、いくつかをご紹介します。

Q 来日10年。日本・日本国に対する感想を。

A 日本に興味を持ったのは、映画「ショウゲン」を共産主義時代に見て、着物文化・わびさび・伝統文化等に惹かれたのがきっかけです。もっと知りたいと思いました。

東京は、ロボット・高層ビルばかりと思っていたが、それほど未来的ではなかった。アジアのにおい（焼き鳥）、そこここに神社 など。京都は、思ったより現代的だった。

Q ブルガリアだけが近隣諸国と友好的との話があったことについて

A 近隣諸国は、ルーマニア・セルビア・マケドニア・ギリシャ・トルコ。

（互いに他国を認めていない関係にある国が近隣諸国にあるが）ブルガリアが友好的である理由は、良い外交・政治。私の仮説であるが、「許し」の文化があると思う。

過去にこだわらず、今これからをどう生きていくかに目が向いていく。

ブルガリア人は合理的。少数民族対応も早くから行っていたので、うまくいっているのでは？と思う。

Q 歌の感じが東洋的であるように感じたが。

A 現在のブルガリア人はヨーロッパ圏であることをアピールしがちであるが、トルコ支配が500年続いたこともあり、また、アジアとヨーロッパの間に位置するため、インド経由の文化もあり、両方の影響がある。スラブの流れが、（東洋と）近くさせているのではないかと思っている。これは専門外のことはあるが。

最後に、「できれば、日本に残って、日本からブルガリアをサポートして行きたい」と、今後の抱負を語られました。参加者は、講師手作りの「マルテニツア」をお土産にいただきました。今後とも日本での研究に、講演に、ビジネスに益々のご活躍を期待しつつ本講演の記録とさせていただきます。

（国際理解講座委員会委員 山田 攝子）

# Diplomats Lecture (第28回ディプロマツツ・レクチャー)

日時：2011年3月10日(木) 午後3時00分～4時30分

会場：国際文化会館 樺山ホール

## テーマ：日本の国際協力の将来

“Future of Japan’s International Cooperation”

講師：佐渡島志郎氏

外務省国際協力局長



ディプロマツツ・レクチャーは年1回、在日各国大使および大使館員を対象に、日本をより深くご理解いただくことを目的として、英語で講演をしていただくという、港ユネスコ協会創設以来継続している大きな事業である。

第28回になる今回のディプロマツツ・レクチャーは、講師として佐渡島志郎氏（外務省国際協力局長）をお招きして開催し、大使12名を含む外交官57名にご参加をいただいた。

最初に、高井会長からの歓迎の挨拶があり、松本副会長から佐渡島局長の経歴などを紹介していただいたから、佐渡島局長に講演していただいた。



佐渡島局長は、「日本は第二次世界大戦後の復興時期には国際社会から経済援助を受けており、世界銀行に対してようやく借金を完済したのは1990年のことであった。」というお話から始め、ODAを中心に日本の国際協力に関する日本政府の動きなど、普段では耳に

することができないような貴重なお話も聞かせていただき、最後に「これからは民間との連携で国際経済協力を実施していきたい」という将来像を紹介された。

関連の資料も豊富にご用意いただき、出席者の興味を強く引き付ける講演内容と感じた。

最後の質疑応答では6人の大使から質問が出て、佐渡島局長から一つひとつ丁寧にお応えいただき、日本の国際協力に対する外国の関心の高さがうかがわれる今回のディプロマツツ・レクチャーであった。

(学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり)



# 港ユネスコ協会 2011 年度年次総会

2011 年 4 月 27 日 (水) 18:30-19:30 会場：港区立生涯学習センター305 号室

今年度の年次総会は平日の晩に開催し、東日本大震災の後ということもあって例年行っているアトラクションは行いませんでした。にもかかわらず、48 名という例年に近い数の出席者がありました。

今回も当協会に補助金を下さっている港区を代表して、武井雅昭区長と教育委員会の方々にもご出席いただきました。

中川副会長の司会で総会資料に沿って進められました。議案に入る前に高井会長から挨拶があり、その中で昨年度の総会で三輪前会長から会長を引き継いでからの一年間を振り返っての総括、並びに創立 30 周年を迎える今年度の記念行事への取り組みについてお話があり、最後に東日本大震災復興への協会としての支援に触れて挨拶を締め括りました。



続いて、武井区長からご挨拶をいただきました。当協会が港区を中心に国際交流活動を推進してきたことへの感謝のお言葉とその結果今年 30 周年を迎えることへのお祝いのお言葉をいただきました。また、港区在住の外国人の割合 (約 1 割) や区内にある大使館の数 (79) から港区の国際性に触れられて、東日本大震災での海外からの支援にも言及されました。と同時に、区としての更なる安全対策に力を注がれるとのお話でした。

その後、高井会長が議長に選出されて議案審議に入りました。昨年度の事業報告、決算報告、今年度の事業計画案、予算案、役員案の以上 5 つの議案は満場一致で承認可決されました。(議案の内容につきましては、お送りしました総会資料をご覧ください)

最後に清水副会長の閉会の辞で今年度の年次総会は無事終了いたしました。

(常任理事・事務局長 水野隆)



(巻頭言 1 頁から続く)

ちなみに、この人物は 1860 年アイオワ州生まれの Earnest Wilson Clement という教育者で、1887 年に水戸へ初来日して以来、一時帰国を挟んで、通算 37 年間日本に滞在しています。その間、札幌農学校で W. クラーク博士の薫陶を受けた新渡戸稲造なども親交があり、1895 年には関東学院の前身である東京中学院を設立し、学院長、教授を務めています。1927 年の最終帰国に際しては、永年の英語教育の功績に対して日本政府から勲五等旭日章が授与されています。

最近はもっと身近なところで歴史を楽しんでいる人もいます。中高年仲間の中には、子供や孫の参考にと、近くの図書館で歴史考証もしながら、「自分史」を作成したり、両親・先祖に関する伝記をまとめるようなひともいます。また、米国の友人の中には先祖調べに凝っているひともいます。その友人によると、米国ではガーデニングと並んで、Genealogy (家系学) が最も人気のある趣味なのだそうです。インターネットを駆使して、自分のファミリーツリーに連なる先祖を次々と調べていき、まだ存命の欧州の遠戚・縁故者とも連絡をとって情報収集して、なんと 17 世紀まで家系をさかのぼったそうです。こうした趣味をもつ人達のニーズに応じて、Ancestry.com、FamilyHistory.com など、家系調べに関連するウェブサイトも開設されており、年々、利用者が増えているそうです。いかにも移民の国らしい面白い趣味だな、と感じます。

以上



## 天を恨まず

名誉会長 三輪公忠

天高く馬肥ゆる秋、目には青葉山ホトトギス初鯉、我と来て遊べや親のない雀、カラス何故鳴くの カラスは山に可愛い七つの子があるからよ、そしてカラスが鳴くからかえろ・・・

- 一) は、草原地帯から農耕地帯へ騎馬民族の侵略に警告、
- 二) は、花の季節が終わってもまだまだ自然は美しい、
- 三) は、老年の寂しさ、街を歩いていて微笑に答えてくれるのはダックスフンドとストローラーの赤ちゃんだけ、
- 四) ヒチコックの鳥の襲撃の恐怖が毎日の現実、
- 五) 昔からそんな訳ではなかったのだ、野口雨情は、人に嫌われそうな醜く不吉な声音の鳥を愛することが出来るように「可愛い七つの子があるからよ」と戦前の日本の子供に教えてくれた。

私は何を言おうとしているのか。言葉のむなしさか。このたびの大災害に何と言ったらいいのか、被災者の皆さんに、言葉を失ったからか。言葉は失ったけれど、言葉になりたがっているマグマが胸中に大きく蟠っている。

吉村昭が阪神大震災後に書いた「歴史はくり返す」と題する文章でこういつている。

関東大震災(1923年)の後で、寺田寅彦ら専門の学者が災害の大きさ原因を調査し報告書にまとめた。死者は68,660名(2006年修正、10万5千人)にも達したが、避難民に正確な情報がない、言論機関で最も早く復旧した東京日々新聞でも4日後のこと、風評は朝鮮人の虐殺まで起こした。死者は家屋の倒壊に加えて火災による。総数は136件にのぼった。我々はそれを昼時の調理の火、台所が出火元と聞かされて育った。「地震がきたら先ず火元」そんな教訓を聞かされていた。しかし別の処にもっと重大な火元があった。この報告書で火災を担当した中村清二理学博士によると学校、試験所、研究所、製造所、工場、病院、薬局等で、棚から転落した薬品が交りあって発火していたのである。その数44箇所。その内ことに東京大学医学部など学校が17箇所であった。避難民の大八車に積んだ家財道具に飛び火引火、道筋に火災が拡散した。これは教訓にしなければならない。調査分析報告書は無償で配布された。その上同じものは岩波書店も印刷して販売した。しかし防災関係者でその貴重な資料を利用していないばかりか、その存在すら知らない人が多いのに驚嘆する。実際、教訓は生かされてこなかった。16年前の阪神淡路大震災で、薬品の転倒、転落がやはり火災の火元になった。それだけではない、このたびの東北関東大震災でも、大津波とは別に東北大学で薬剤の混淆による火災が発生した。

関東大震災の直後、渋沢栄一は「天誅」といった。人々は納得した。石原慎太郎都知事は「天罰」と言って物議を醸した。外国人のコメントは、被災地の人々の秩序、冷静さに驚嘆し、賛美した。絶望ではない希望を其処に見ていた。

その気質の起源は何処に在るのか。昔イギリス人のジョージ・サンソムは日本人がこの自然災害の多い国土に住まいながら、いつも自然を愛し感謝して暮らしている訳を、神道の祝詞からよみとっていた。極寒のシベリアなど、もっと過酷な自然環境の地からこの島国、豊草原の瑞穂の国、に渡ってきたからだろうと。天誅、天罰という考え方、納得するすべがあるから、また自然を尊ぶ再生があるのだろう。今度こそ教訓を学んでほしい。



気仙沼市の中学生が卒業式の答辞で叫んだ一声「それでも天を恨まず」は、言葉を失っていた私の脳天に刺さり、私は泣いた。ここからきっと美しい明日が開く。(2011・5・25)

# 生き生き、わくわくする MUA「英会話講座」の門を叩いてみませんか！！

今日、我が家から一歩出てから帰宅するまでに、外国人に出会わない日があるでしょうか？特に港区には外国人が約2万1千人在住、なんと人口の1割強を占めています。

「港区在住の外国人との相互交流を更に深めよう」を目的に当協会主催の「英会話教室」がその第一歩を踏み出したのは1983年9月9日。その後、苦節28年、その流れは今も脈々と続いています。今年、協会がその創立30周年を記念する機会に、この流れを更に大きく、深くしようではありませんか。

現在、初級・中級クラスで学んでいる受講生の数を含めると、延べ1,900人を優に超える数の人がこの講座で学んだこととなります。ここで学んだ「英会話力」が、自分の仕事、趣味、学会、受講生仲間との海外旅行などに大いに活かされています。更にお目出度いことに、受講生同士の結婚もありました。受講生仲間が集い、習った英語を使いながら楽しむ焼肉パーティでの味は格別でした。また、時々、マードック先生を囲んでやる飲み会では、一段と声も大きくなります。



日頃、異なった言葉を通して暮らす人間が、「英語」という共通言語を使ってお互いに考えていることを「Communicate」できることは、何と素晴らしいことでしょう！

いつも明るく、積極的で、ユーモアのセンスに溢れたマードック先生から、楽しく愉快地「英会話」を学ぼうではありませんか！参加するのに試験など、一切ありません。最初は「It's all Greek to me」の状態であっても、心の中で「Rome was not built in a day」や「Make haste slowly」を繰り返していれば、きっと「継続は力なり」の成果があなたのものになるでしょう。

## Expand your English horizons at Minato UNESCO

クラス	初級	中級
日時	4月20日～8月17日 毎週水曜日	4月19日～8月9日 毎週火曜日
	両クラスとも全14回、午後6時30分～8時30分	
場所	麻布区民センター（六本木）	男女平等参画センター（田町）
講師	Mr. Mark Murdock（米国人、NOVA 英語講師歴任）	
参加費	港ユネスコ協会会員：22,000円、一般：24,000円	
問い合わせ 申し込み	港ユネスコ協会事務局：03-3434-2233（Tel & Fax） 午前10時30分～午後5時30分（火～金のみ）	

（語学研修委員会担当常任理事 友金 守）

# 事務局便り



【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆7月6日（水） 18:00-19:45 モンゴル紹介の夕べ ～モンゴル中学生訪日団を迎えて～  
(生涯学習センター101号室)
- ☆7月9日（土） 13:30-16:00 ユースと外国人のための浴衣体験教室 (生涯学習センター203号室)
- ☆7月20日（水） 18:30-20:30 MUA サロン（話：永野博さん） (事務局)
- ☆7月30日（土） 12:00-15:30 沖縄の家庭料理 (男女平等参画センター)
- ☆9月3日（土） 13:00- 特別プログラム「日本文化と世界遺産」文化庁近藤長官他（赤坂区民センター）
- ☆9月17日（土） 9:15-10:00(レク) 10:30-14:45(鑑賞) 日本文化紹介「文楽」レクチャーと鑑賞 (国立劇場)

【ご支援ありがとうございました】

☆「ミンダナオ子ども図書館」への支援

- ・「国際理解講演会」会場でのご寄付 2,350 円（2011.3.4）
- ・支援物資のご寄付：秋山雅代、今村孝子、金澤由里（敬称略）



☆ 東日本大震災 子ども支援（日ユ協連）への義援金

会員 43 名様から合計 420,000 円をお寄せ下さいました。（敬称略、五十音順）

5 万円 金澤由里・高井光子・中川統夫 1 万 5 千円 水野隆 1 万円 W&京子アカーマン・石川奉子・大元マリ・川島嘉子・高亀裕信・佐藤美子・佐藤康子・篠田健司・清水順子・棚橋征一・永井美智子・永野博・平方一代・松崎加寿子・松根好江・山本俊介 5 千円 井ロフミ子・石山昌代・磯部豊子・今村孝子・上野圭子・菊地賢介・清水明美・土田元子・友金守・成瀬成子・深川忍・宮下ゆかり・三輪公忠・山田陽子・渡部俊子 4 千円 笠原正子 3 千円 江原音子・吉兼実・吉永まさみ 2 千円 斉藤雅子・鈴木明美・福原忍 1 千円 秋山雅代

上記 42 万円に、港ユネスコ協会平和基金からの 8 万円を加えて、合計 50 万円を 4 月末日ユ協連へ送金しました。日ユ協連は、全国のユネスコ協会から送られた義援金を、学校支援（学習に必要な教材・備品などの支援）と、奨学金（災害遺児などへの奨学金の創設準備中）として活用することになっています。

港ユネスコ協会は引き続き東日本大震災で被害された方々への支援を続けて行きます。

【事務局スタッフの交替のお知らせ】

3 月 31 日を以って、長い間事務局スタッフとして協会活動に貢献されてきました笠原正子さんが事務局を去り、4 月 1 日より水曜日と金曜日の勤務として新しく武田香代子さんが入られました。この結果、火曜日と木曜日は深川忍さん、水曜日と金曜日は武田香代子さんとなりました。よろしくお願ひ致します。

---

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

電子メール：minato-unesco@nifty.com ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp/>

---

■ 編 | 集 | 後 | 記 ■ ◆数週間前に NHK 地上波で放送された「カズオ・イングロを探して」という番組で、日本生まれの英文作家である同氏の生い立ちを特集して以来、ちょっとしたブームとなっている。元々同氏の著作の大ファンである小生としては嬉しい限りであるが、日本語訳版ではなく非常に味のある文章で綴られた英文版を是非味わってほしいと思う。（須田） ◆先日、好きなノンフィクション作家が自著でとり上げた彫刻家イサム・ノグチに関する講演をするというので聴きに行った。膨大な時間、労力、コストが掛ることを厭わずに、自分自身の眼で史料に当たり、関係者を取材して回るというホンモノの作家魂に触れて感動した。（棚橋） ◆冬の間通っていた鹿島港の船宿も周りの船宿も、あの日をさかいに休業状態が続いていましたが、ここにきてようやく少しずつ営業を再開できるようになったようです。東日本の港に一日も早く昔の活気が戻ってくることを願っています。（水野） ◆ニューヨークで今、アコーディオンが「癒しのレトロ・ミュージック」として人気が高まっているとテレビが伝えていました。清水軍治副会長のアコーディオン演奏を身近で楽しめる幸せに感謝いたします。昨年、モンゴルの留学生がとても感動していました。（高井）